

カルデシズムの世界観と人間観

カルデシズムの教えによれば、世界は超越的な神によって統御されるいくつかの小世界からなっており、進化と因果律という法則に支配されているという。それらの世界を生きる存在としての霊も同じ法則に従い、与えられた自由意志によって輪廻転生しながら高等な霊へと進化していく。カルデシズムではこれを「霊の進化」と呼ぶ。

小世界は進化の度合いに応じていくつかのレベルに分けられる。低位から上位に、未熟な霊の住む「原始的な世界」、悪がはびこる「償いと試練の世界」、償いが終わった霊が新たな力を獲得する「再生の世界」、善が悪を支配する「幸福な世界」、善が充溢する「天界あるいは神聖な世界」である。これらの世界は異なる次元で共時的に存在しており、ある世界が上位の世界に進化するというものではない。人間が住む世界は「償いと試練の世界」で「地上界」とみなされ、「霊界」であるそれ以外の世界と区分される。

地上界に住む人間の本体は霊であり、ペリスピリト（有機的流体）という霊的エネルギーを伝達するフルイドと呼ばれるものによって肉体と結び付けられている。肉体を持った霊は魂と呼ばれる。魂は地上界に生きながらも、ペリスピリトを介して様々な霊界と交流することができる。

霊という存在

カルデシズムでは肉体は霊の監獄か檻のようなもので、肉体から解放された霊は本来の自由を獲得できると理解する。より高貴な能力も享受できるようになる。肉体から霊が分離することは物質欲を脱却することにつながり、霊界での霊のさらなる進化が望まれる。それゆえ霊と肉体が分離した状況は「霊の決定的で平常な姿」だという。いずれ霊が究極的に救済されると、霊は「天界あるいは神聖な世界」に到達するという。イエス、モーセ、カルデックは天界に辿りついたとされる。

霊との比較において肉体を劣位に置く捉え方は、ソクラテスやプラトンの思想から導かれている。カルデックは、「霊が肉体に隷属する限り、決してわれわれが願っている対象、すなわち真理を獲得できないだろう。それゆえ真の哲学者たちは死の準備を心がけ、彼らにとって死ぬことは恐ろしくなかった」という。

霊は進化の法則に従うため、停滞しても退化することはないとされ、信仰をつづける限りより良き進化・発展があると信じられている。カルデシズムの信者らは、霊の進化はちょうど学校で進級するのと同じようなものだという。努力は必要だが、いったん進化した霊の「学年」は下がらないという。このようにカルデシズムでは世界を学校制度とのアナロジーで語る傾向がある。信者らは救済されるためには読書や学習を重んじなければならないと考えているが、それはこうしたカルデシズムの世界観に根差しているとみられる。

輪廻転生

このような輪廻転生の教えは、一定のキリスト教信者にとつ

て有効な意味をもっている。キリスト教では、人間はいずれ死後の審きを受けて、天国の救いか、地獄の罰か、煉獄の苦しみを受けることになる。しかし、カルデシズムの教えによれば現在より劣位の世界に落ちることはないということから、地獄や煉獄への恐怖心から解放されるのである。

キリスト教会は、輪廻転生という考え方がイエスの教えを根底から覆す思想だと批判する。しかし、前号で述べたように、カルデックは教えを聞き届ける人びとの霊の進化の度合いが低かったためにイエスが教えを十分説けなかったといい、イエスの教えを完全なものにするのが輪廻転生の教えだという。それゆえ、カルデックは進化の原理こそが救済の本当の意味を復権する鍵になるとする。そして彼はキリスト教における復活をつぎのように説明する。

復活とは輪廻転生を意味する。復活とは死者の肉体が生き返ることである。しかし科学は物質が再生することが不可能であることを立証している。輪廻転生とは、霊が肉体をもつようになることである。別の新たな肉体に霊が宿るのである。洗礼者ヨハネは、預言者エリヤの生まれ変わりだったが、ヨハネの肉体はエリヤのものでなかった。ヨハネはエリヤが転生したのであり、復活したのではない (Kardec 1993: 53)。

このカルデックの言葉は、次の聖書の章句を再解釈したものである。

イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人びとは言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」そのほかにも、「彼はエリヤだ」という人もいれば、「彼は昔の予言者のような予言者だ」という人もいた。ところが、ヘロデはこれを聞いて、「私が首をはねさせて殺したあのヨハネが死者の中から生き返ったのだ」と言った (マルコ、6:14-16)。

このようにキリスト教のドグマを根本から解釈しなおすカルデックの教えがキリスト教会から危険視されるのも当然である。信者らはこの教えを実践することが真のクリスチャンであると理解している。カルデシズムはイエスの教えになんら抵触するものではないと考えているのである。

カルデシズムでは、罪の償いと進歩のために輪廻転生があると理解する。そして、「霊は新しい生活をはじめ (輪廻転生する) たびに、進歩のあゆみを進めている。霊があらゆる不純物を取り去ることができれば、肉体を伴った生活における試練は必要なくなる」ともいう。「償いと試練の世界」である地上界はまた、物質に執着する霊の世界である。「この世に霊が生まれるのは、神が霊の進化を願ったのことであり、その生まれ変わりが過去の償いである場合もあれば、(神から他者を救済せよと) 使命を与えられている場合もある。霊が進化するにはあらゆる盛衰を経験しなければならないが、そこに償いの問題がある」という。

【参考文献】

Kardec, Allan. *O evangelho segundo o espiritismo*, Editora Pensamento, São Paulo, 1993.